

# 音楽教科書にみる自国の伝統文化のあり方の検討試論 —インドネシアの小中学校音楽教科書の分析をとおして—

本 多 佐保美

千葉大学・教育学部

An Essay Study on the State of Traditional Culture of Music Education:  
Through an Analysis of Music Textbooks for Primary and Secondary School of Republik Indonesia.

HONDA Sahomi

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本稿では、自国の伝統音楽文化が学校教育においてどのように扱われているかを明らかにすることを目的として、インドネシアの教科書を分析した。インドネシアの小中学校の音楽教科書において、歌唱でも器楽でも鑑賞でも、教材として愛国歌・必須の歌、および各地方の歌が用いられており、ナショナル・アイデンティティの形成に音楽の力が使われていること、そして、多民族国家であることから、インドネシア各地域・各地方の特徴的な歌や楽器について、演奏や鑑賞を通して、民族文化の豊かさや多様性を理解することが目指されていることが明らかとなった。

キーワード：伝統文化 (Traditional Culture), インドネシア (Republik Indonesia),  
小中学校音楽教科書 (Music Textbooks for Primary and Secondary School)

## 1. はじめに

本研究の目的は、アジアの国々の中の一つ、インドネシアの音楽教育に注目し、その教科書の分析を通して、自国の伝統音楽文化がどのように扱われているのかを明らかにすることである。

筆者はこれまでに、自国の伝統音楽文化を学校教育においてどのように扱うかという問題意識にもとづき、研究を継続しているが、我が国の音楽科教科書にみる日本伝統音楽の取り扱いについて本多2006、および2017において検討している。本多(2017)では、中学校音楽教科書の戦後の歴史の変遷および日韓比較の視点から、教科書における伝統音楽の割合は韓国が約25パーセントであるのに比べ、日本では約10パーセントであり、活動領域は鑑賞が主となる傾向が見られることを指摘した。アジア諸地域の音楽教育の中での、自国の伝統音楽文化の取り扱いについて、比較の視点をまじえ検討することで、我が国の状況もより明確に見えてくる。

諸外国、とくにアジア地域の音楽教育や音楽教科書についての研究でまとまったものとして管見に入ったものでは、滝沢達子編著 (Takizawa ed. 1992) がある。ここでは、シンガポール、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピンおよび日本の教育制度やカリキュラム、学習内容の具体についての報告がなされている。また、滝澤(1993)では、シンガポール、タイ、インドネシア、フィリピンの音楽教育の現地調査報告および教科書紹介等を通して、「文化」を意識した音楽教育の志向や、西洋と自国の音楽の扱いのバランスの問題等が報告されている。

一方、高萩(1995)では、ISME (International Society for Music Education 国際音楽教育協会) を中心とする音楽教育の国際化の動向が報告されているが、各地域の研究報告としては、アメリカ、イギリス、フランス、フィンランド、ポーランド、オーストラリアのみで、アジア地域の国々の音楽教育についての報告は見られない。ISMEの地域学会であるAPSMER (Asia-Pacific Symposium on Music Education Research) の第1回大会は1997年であり、その頃から徐々に、アジア地域の音楽教育への視点とアジア諸国としての連帯が育まれたといえるかもしれない。

国立教育政策研究所の調査 (小田豊編著2003) では、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツに並び、中国、韓国、シンガポール、台湾各国の音楽科教育カリキュラムの内容や方法等が検討され報告されている。また、日本学校音楽教育実践学会編著 (2012) では、国際比較の視点から、韓国のカリキュラムと授業実践が具体的に取り上げられている。

本多は2019年3月に、インドネシアの音楽や音楽教育の現状等についての調査に同行する機会を得た<sup>1)</sup>。ガムラン音楽やケチャで大変有名なアジアの一国であるインドネシアの音楽教育の実際はどのようなものであるのか。我が国の、日本の音楽教育に生かせる視点はないか。そんな課題意識を抱きつつ参加した。それをきっかけとして、音楽教科書の入手、学術的ネットワークの広がり、留学生を対象とする試行的なアンケート調査の実施等を行ったので、本稿ではアジア地域の一国の音楽教育のあり方について、インドネシアの音楽教科書の分析を中心に考察・報告し、検討の序論としたいと思う。

インドネシアの音楽教育の実態の一端を知るための方法を模索し、千葉大学へのインドネシアからの短期留学

連絡先著者：本多佐保美 honda@faculty.chiba-u.jp

生に試行的にアンケート調査を実施した<sup>2)</sup>。その結果も適宜、参照しながら、以下、考察を進める。なお、アンケートは「2019アンケート」と略記する。

## 2. インドネシアの教育制度の概要

赤道直下に位置するインドネシアは、1万数千の島々からなる島嶼国家であり、面積は日本の約5倍、人口は現在、約2.6億人。中国、インド、アメリカに次ぐ世界第4位の人口を有する。首都はジャカルタ、公用語はインドネシア語であり、300以上の民族からなる多民族国家である。

図1はインドネシアの国章で、「ガルダ・パンチャシラ」と呼ばれる。伝説の神鳥であるガルダが足でつかんでいるところに書かれた言葉は、「ばらばらであるが、それでもなお一つ」で、「多様性の中の統一」と訳される国家統合の理念である。



図1 インドネシアの国章

また、盾の中に描かれた絵はそれぞれ、

1. 唯一神への信仰（金の星）
2. 公正な人道主義（鎖）
3. インドネシアの統一（菩提樹）
4. 代議制による民主主義（野牛）
5. 全インドネシア国民に対する社会的公正（米と綿花）、というインドネシアの建国5原則（パンチャシラ）を表している。

インドネシアの学校制度は、日本と同じ、6・3・3制をとる。小学校6年間、中学校3年間、高校3年間で、小学校中学校までが義務教育となっている。

現在の学校教育課程は、2013年に導入されたカリキュラムに基づいている。2013年カリキュラムの特徴としては、それ以前の2006年カリキュラムから教科数が削減されたこと、資質・能力レベルの明確な定義、テーマ学習の導入等があげられる（田中 2019, p. 30）。

表1・2は、2013年カリキュラムによる各教科の週当たり時間数を示したものである<sup>3)</sup>。

各教科は、AグループとBグループとに分けられ、Bグループは、地域によって内容を決定できる教科となっている。音楽は、Bグループの文化芸術 (Seni Budaya) の中に含まれる。文化芸術 (および工芸) は、小学校で週当たり4～5時間 (1時間は35分)、中学校で週当たり3時間 (1時間は40分) となっている。

文化芸術に含まれる教科は、小学校では音楽のほか、美術 (Seni Rupa: 直訳は「形・デザイン」)、工芸、舞踊、中学校では音楽のほか、美術、舞踊、演劇があり、これらの各教科が教科書としては1冊の中に含まれる形態となっている。

## 3. 調査対象教科書について

2019年3月の調査時に入手した教科書は、表3に示す5冊である (表3および写真1)。

インドネシアにおいて教科書は、それまで国定であったものが、2001年のカリキュラム以降、検定教科書となり、地域や学校によって使われている教科書は異なるという (田中 2019, p. 31)。この5冊の教科書は、ソロおよびジャカルタにて出版されたものである。



写真1 教科書の表紙

表1 小学校の各教科の週あたり時間数

	科目	週あたりの時間数 (1 = 35分)					
		1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
Aグループ							
1	宗教と道徳	4	4	4	4	4	4
2	パンチャシラと公民	5	5	6	4	4	4
3	インドネシア語 (国語)	8	9	10	7	7	7
4	算数	5	6	6	6	6	6
5	理科				3	3	3
6	社会				3	3	3
Bグループ							
1	文化芸術・工芸	4	4	4	5	5	5
2	健康体育	4	4	4	4	4	4
時間数合計		30	32	34	36	36	36

表2 中学校の各教科の週あたり時間数

	科目	週あたりの時間数 (1 = 40分)		
		1年生	2年生	3年生
Aグループ				
1	宗教と道徳	3	3	3
2	パンチャシラと公民	3	3	3
3	インドネシア語 (国語)	6	6	6
4	算数	5	5	5
5	理科	5	5	5
6	社会	4	4	4
7	英語	4	4	4
Bグループ				
1	文化芸術	3	3	3
2	健康体育	3	3	3
3	工芸	2	2	2
時間数合計		38	38	38

表3 教科書リスト

教科書名	学年	出版年	基づくカリキュラムの発行年	出版社名 (出版地)
Seni Budaya dan Keterampilan	小学6年	2007	2006	Penerbit Erlangga (Jakarta)
Seni Budaya dan Keterampilan	小学5年	2015	2006	Global (Solo)
Seni Budaya	中学3年	2012	2006	Global (Solo)
Seni Budaya	中学1年	2016	2013 (Edisi Revisi 2016)	Yudhistira (Jakarta)
Seni Budaya	中学1年	2017	2013 (Edisi Revisi 2016)	Penerbit Erlangga (Jakarta)

「2019アンケート」での教科書使用についての回答では、教科書をつねに使用していたと答えたのが1名、時々使用していたと答えたのが6名であった。

本稿では、表3の5冊のうち、小学校用、中学校用、

各1冊を検討する。Seni Budaya dan Keterampilan, 小学5年生用, 2015年出版, Global社版と, Seni Budaya, 中学1年生用, 2016年出版, Yudhistira社版を取り上げてその内容を検討することとした。

#### 4. 教科書の構成

小学5年生用，中学1年生用，それぞれの教科書の各項目を一覧表にしたのが表4・5である。表4は，ゼメスター1，ゼメスター2の2部分からなる。表5は，第5章～第8章までの4部分からなる。

教科書の構成としては，まず「学習の目標（ねらい）」が示され，それに沿って各項目の解説がある。こういうことをやってみよう，といった「活動」の項目や「課題」，「調査研究」の項目があり，各ゼメスターまたは各章の

終わりには，「まとめ」および「振り返り」がある。最後に主として知識的理解を問う「評価」の項目が設定されている。

学習の分野・領域は，歌唱，器楽，鑑賞で，創作領域はない。小学校用では，この教科書だけの特徴かもしれないが，学習のまとめとして「演奏会をしよう」という，上演の準備・開催・評価の内容が設定されている。

表4 小学5年生教科書

小学5年生

学習の目標／ゼメスター1	
A	インドネシア全域各地方の様々な歌の様式をわかるようになる
B	アンサンブルの種類の意味を説明できる
C	インドネシア全域各地方の様々な音楽や歌にたいする評価について，意見を述べる
D	楽器を，リズムと旋律に気をつけて，シンプルなアンサンブル形態で演奏する
E	音楽と踊りと言葉の融合した芸術の上演をする
学習の内容	
A	インドネシア全域各地方の歌の様式
1	地方の歌
2	ナショナルな歌・必須の歌
B	アンサンブルの種類の意味
C	インドネシア各地域の様々な音楽の鑑賞
1	ガムラン
2	ガンバン・クロモン
3	コリンタン音楽
4	アングルン
D	リズム楽器と旋律楽器の演奏
1	リズム楽器の演奏
2	旋律楽器の演奏 リコーダー
E	音楽と踊りと言葉の融合した芸術の舞台上演
1	上演準備の段階
2	公演開催の段階
3	評価の段階

学習の目標／ゼメスター2	
A	インドネシア全域各地方の様々な歌の様式をわかるようになる
B	アンサンブルの種類の意味を説明できる
C	必須の歌とインドネシア全域各地方の様々な音楽や歌にたいする評価について，意見を述べる
D	楽器を，リズムと旋律に気をつけて，アンサンブル形態で演奏する
E	クラスまたは学校での上演のため，インドネシア各地方の歌を簡単な伴奏で演奏する準備をする
F	クラスまたは学校での上演のため，インドネシア各地方の歌を簡単な伴奏で演奏する
学習の内容	
A	インドネシア全域各地方の歌または音楽の様式
1	スマトラ地方の音楽
2	西ジャワ地方の音楽
3	スラウェシ地方の音楽
B	アンサンブルの意味
C	必須の歌とインドネシア各地域の様々な歌または音楽の鑑賞
1	Bagimu Negeriの鑑賞
2	Satu Nusa Satu Bangsaの鑑賞
D	アンサンブルの形態でリズム楽器と旋律楽器を演奏する
1	リズム楽器の演奏
2	旋律楽器の演奏 ピアニカ（楽器の名称，運指，姿勢）
E	インドネシア各地方の歌を簡単な伴奏で演奏する準備と上演
1	イントネーション
2	アーティキュレーション
3	呼吸
4	フレージング
5	Pembawaan

表5 中学1年生教科書

中学1年生

第5章 ユニゾンで歌う	
学習の目標	
1	インドネシア各地方の歌の多種多様性を評価でき、愛好することができる
2	ユニゾンでの歌唱の技術とグループでの歌唱の技術を理解する
3	正しい技術で、ユニゾンで、またはグループで歌を歌う
4	グループで歌う歌を調査する
5	音楽と集団での歌を結び付けて考える
6	集団での歌について口頭でまたは記述して発表する
学習の内容	
A	歌う時の声の技術について知る
1	アーティキュレーション
2	フレーズまたは言葉を区切ること
3	イントネーション
4	呼吸 a. 腹式呼吸 b. 胸式呼吸 c. 横隔膜
5	共鳴
6	ヴィブラート
7	即興
8	姿勢
B	ユニゾンで歌う
C	グループで歌う

第6章 2声またはそれ以上の集団で歌う	
学習の目標	
1	2声以上の集団で歌うことについて理解する
2	2声以上の集団での歌を歌う
3	集団での歌唱の技術を記述することができる
4	集団での歌を同定する
5	集団での歌唱の技術を探求する
6	音楽と集団での歌を結び付けて考える
7	集団での歌について口頭でまたは記述して発表する
学習の内容	
A	複数の声で歌う
B	複数の声で歌う練習
1	カノンの練習
2	声の練習
3	グループでの歌唱と合唱の練習

第7章 簡単な楽器演奏をする	
学習の目標	
1	一人または集団で簡単な楽器を演奏する技術を理解する
2	一人または集団で簡単な楽器を演奏する
学習の内容	
A	簡単な楽器について理解する
B	楽器を演奏する
1	リコーダーを演奏する
2	ギターを演奏する
C	インドネシアの楽器・器楽
1	ティファ
2	アングルン
3	チャルン
4	ササンド
5	サルアン

第8章 グループで楽器演奏をする	
学習の目標	
1	簡単な器楽アンサンブルの技術について理解する
2	簡単な器楽アンサンブルを演奏する
学習の内容	
A	器楽アンサンブルについて理解する
B	器楽アンサンブルの演奏技術
1	ピアノの演奏
2	トライアングルの演奏
3	カスタネットの演奏
C	器楽アンサンブルの演奏をする

### 5. 教科書の内容

#### (1) 歌唱

歌唱の領域では、インドネシアのナショナルな歌・必須の歌<sup>4)</sup>や、各地方の様々な歌の多様性を理解し愛好することが目指される。

表6に、教科書掲載の必須の歌および地方の歌の曲名と作曲者名等を抽出して示した。必須の歌が全体の約3割、各地方の歌が全体の約7割を占める。これらの歌は

歌唱はもとより、器楽でも鑑賞でも行われる。小学校、中学校、両方で掲載されている曲は、「重複」として示した。

必須の歌は、愛国歌であり、独立を達成した偉大な民族の繁栄をほめたたえる歌であり、祖国愛の気持ちを育むものである。作曲家の名前は明記されており、音楽的には、行進曲風であったり、タッカのリズムが使われたり、また定型リズム（♪♪♪）がみられる等、我が国のいわゆる文部省唱歌と共通する音楽の特徴も認めら

表6 歌の曲名リスト

小学5年生

	重複	項目	曲名	地方・地域／作曲者	音楽的特徴
ゼメスター1					
1	●	地方の歌／歌唱	Yamko Rambe Yamko	イリアン島の歌	5音音階
2		地方の歌／歌唱	Tanduk Madjeng	Madura地方の歌	5音音階, 定型リズム
3		必須の歌／歌唱	Indonesia Tumpah Darahku	Ibu Sud作曲	1拍目休符
4	●	必須の歌／歌唱	Maju Tak Gentar	C. Simanjuntak作曲	行進曲風
5		器楽	Cening Putri Ayu	バリの歌	5音音階
6		器楽／リコーダー	Cing Cangkeling	西ジャワ地方の歌	5音音階
ゼメスター2					
1		地方の歌／器楽	Burung Kakatua	Maluku地方の歌	4分の3拍子, 2声部
2	●	必須の歌／鑑賞	Bagimu Negeri	Kusbini作曲	タッカのリズム
3	●	必須の歌／鑑賞	Satu Nusa Satu Bangsa	L. Manik作曲	定型リズム
4		地方の歌／器楽	Ayo Mama	Maluku地方の歌	
5		必須の歌／器楽	Ibu Kartini	W.R. Supratman作曲	定型リズム, リコーダーとピアノカ
6	●	地方の歌／歌唱	Si Patokaan	北スラウェシ地方の歌	
7	●	地方の歌／歌唱	Kicir-Kicir	ベタウイ地方の歌	

中学1年生

1		地方の歌／歌唱	Gundhul Pacul	中部ジャワの歌	5音音階（26抜き音階）
2		地方の歌	Apuse	パプアの歌	
3	●	地方の歌	Kicir-Kicir	ジャカルタの歌	
4		地方の歌	Anging Mamiri	南スラウェシ地方の歌	
5	●	地方の歌	Yamko Rambe Yamko	イリアン島の歌	5音音階
6	●	必須の歌	Satu Nusa Satu Bangsa	L. Manik作曲	定型リズム
7		必須の歌	Tanah Airku	Ibu Sud作曲	
8		地方の歌	Gambang Suling	中部ジャワの歌	
9	●	必須の歌	Bagimu Negri	Kusbini作曲	タッカのリズム
10		必須の歌	Mengheningkan Cipta	T. Prawit作曲	
11	●	地方の歌	Sipatokaan		
12	●	必須の歌	Maju Tak Gentar	C. Simandjuntak作曲	行進曲風
13		地方の歌／器楽	Manuk Dadali	西ジャワ地方の歌	5音音階（26抜き音階）
14		地方の歌／器楽	Burung Tantina	Maluku地方の歌	4分の3拍子
15		／器楽	Kemesraan		

れる。

「2019アンケート」で小中学校で歌った歌で、ナショナルな必須の歌として挙げられたのは、Bagimu Negeri, Satu Nusa Satu Bangsa, Tanah Air, Mengheningkan Ciptaである<sup>5)</sup>。

一方、インドネシア各地方の様々な歌の様式や多様性を理解し、民族文化の豊かさを認識することも求められる。各地方の歌は、地元の言葉による詩と地域ごとの特徴をもった旋律をもち、地元の楽器によって演奏される。

音楽的には、5音音階が多く、中でもいわゆる26抜き音階といって、沖縄音階と似た感じをもつ曲もある。

「2019アンケート」でも小中学校で歌った曲として、Gundhul Pacul, Manuk Dadali, Apuse, Anging Mamiri等の曲名が挙げられた。

歌唱の技術については、小学校、中学校ともに、イントネーション、フレージング、呼吸、姿勢等についての解説が記述されている。

## (2) 器楽

器楽については、リズムと旋律に気をつけて、簡単なアンサンブル形態で楽器を演奏することが目指されている。

教科書掲載の楽器は、リズム楽器としては、トライアングル、カスタネット、タンブリン、コンガ、シンバル、クندان（太鼓）、ティファ（インドネシア東部の太鼓）等である。

旋律楽器は、リコーダー、ピアノ（鍵盤ハーモニカ）、中学校でギターであり、小学校で、リコーダーの二重奏（曲名 Cing Cangkeling）やリコーダーとピアノによる合奏（曲名 Ibu Kartini）、中学校で、楽器の指定はないが、Manuk DadaliやBurung Tantinaを器楽合奏で演奏するよう、楽譜が掲載されている。

「2019アンケート」での、学校にどんな楽器があったかとの問いに対する回答としては、西洋の楽器では、ピアノ（7：数字は回答者数）、リコーダー(6)、トライアングル(3)、ドレミ木琴(2)、ウッドブロック(2)、シンバル(2)、タンバリン(1)、ギター(1)、ピアノ(1)であり、伝統楽器としては、ガムラン(6)、アンクルン(5)、スリン（笛）(5)、クندان(4)、ゴング(4)、ガンバン（木琴）(3)、チャルン(3)、ルバナ（わく太鼓）(3)、カチャピ(2)、タロンペ（ダブルリード楽器）(2)であった。

西洋の楽器としては、リコーダーとピアノ、そしてリズム打楽器が浸透していることがわかる。詳しい用いられ方は不明ではあるが、伝統楽器・自国の楽器もガムランをはじめとして、各地方・地域の楽器が学校で扱われている。

教科書では、鑑賞として伝統楽器・自国の楽器が扱われている。小学校で、ガムラン、ガンバン・クロモン、コリンタン音楽、アンクルン、中学校で、ティファ、アンクルン、チャルン、ササンド、サルアン（笛）が取り上げられている。ここでもまた、インドネシア各地域の豊かな音楽文化を誇りに思い、愛好することが目指されている。

## 6. 考察と今後の課題

本稿では、自国の伝統音楽文化が学校教育においてどのように扱われているかを明らかにすることを目的として、インドネシアの教科書を検討し、分析を進めた。限られた分析対象ではあったが、アジアの一国における学校教育の中での伝統音楽文化のあり方を探る一つの契機とすることを試みた。

インドネシアの小中学校の音楽教科書において、歌唱でも器楽でも鑑賞でも、教材として愛国歌・必須の歌、および各地方の歌が用いられており、ナショナル・アイデンティティの形成に音楽の力が使われていること、そして、多民族国家であることから、インドネシア各地域・各地方の特徴的な歌や楽器について、演奏や鑑賞を通して、民族文化の豊かさと多様性を理解することが目指されていることが明らかとなった。

インドネシアの現行カリキュラムは、「児童生徒が習得すべき資質・能力レベルが明確に定義され」とされる（田中 2019, p. 30）が、教科書の紙面を見る限りでは、知識理解面と技能面での習得すべき能力は明示されている。しかし、我が国の平成29（2017）年告示新学習指導要領で、知識・技能の基礎的な部分を習得し、それを活用して思考力・判断力・表現力の伸長を目指すべく資質・能力の3本の柱が全教科にわたって示されたが、インドネシアでは、そうした思考力の側面からの教科書構成は見られない。創作または音楽づくりの活動分野がないことも、このことと一脈通じることと言えるかもしれない。

多民族国家という国の成り立ちの根本に基づき、また国家の辿ってきた歴史的経緯により、当然のことながら学校教育における学習内容は大きく異なる。また、文化芸術に対する人々の捉え方が違うことから、教科の学習内容も違ってくることも、あらためて確認された。インドネシアでは、舞踊（Tari）が文化芸術の教科目の中にしっかりと位置付いていることは、我が国と大きく違う点である。

西洋音楽文化に対するスタンスも、我が国とは大きく異なる。今回、検討した教科書では、ベートーヴェンやヴィヴァルディの音楽作品を鑑賞するといったページは全く見られなかった<sup>6)</sup>。これも、西洋音楽文化受容の歴史的経緯が全く異なることからくる音楽観の反映と捉えることができるだろう。

今回は、限られた資料の分析にとどまったため、今後はさらに、新たな資料やデータの収集につとめ、また、他のアジアの国々の状況も見えていくことで、引き続き我が国の音楽教育への比較的視点や示唆を得ることを継続していきたい。

## 付 記

本稿は科学研究費補助金「日本伝統音楽と民族音楽を位置づけた学習理論構築と実践開発—小泉文夫の理論を軸に一」（代表：権藤敦子、課題番号18K02625）の研究成果の一部である。

## 注

1. 2019年3月14日～21日、東京音楽大学付属民族音楽研究所の木村佳代氏が主宰するインドネシア・バニュマス・ツアーに同行する機会を得た。バニュマス地方及びソロ（スラカルタ）にて当地の民俗芸能、舞踊、影絵芝居等を鑑賞したり、バニュマスの芸術高校及びソロのインドネシア国立芸術大学にて授業参観、インドネシア在住日本人へのインタビュー等を行った。同行者は、田中多佳子（京都教育大学）、大田美都（小田原短期大学）、川口明子（岩手大学）らである。
2. 2019年6月26日に実施。千葉大学ツィンクル事業（さくらサイエンスプラン）に参加のインドネシア留学生、7名を対象とする。質問内容は、小中学校の音楽授業においてどんな歌を歌ったか、どんな楽器があったか、鑑賞の内容、音楽理論・楽譜（五線譜）・教科書使用の有無、課外活動、地域の音楽について等である。回答者の年齢は、引率の教員も含んだため、40代1名、30代1名、20代5名で、出身地は、東ジャワが3名、西ジャワが2名、中部ジャワ1名、スマトラ1名であった。アンケートの内容項目作成については、川口明子氏に多大なご示唆を賜った。記して感謝申し上げる。
3. 2013年カリキュラムの時間配当表は、Download Kurikulum 2013 untuk SD/SMP (penelitianindakankelas.blogspot.com)、および田中2019, p. 29を参照して作成した。
4. ナショナルな歌・必須の歌は、Lagu Nasional dan Lagu Wajibで、wajibとは「必須の、義務の」という意味である。風間純子は、この歌を「国定義務唱歌」としている（風間 2008, p. 4）。本稿では、「必須の歌」と訳す。
5. そのほか、教科書には載っていないが、アンケートで挙げられた曲として、Indonesia Raya（国歌）、Garuda Pancasila, 17 Agustus 1945がある。
6. 今回収集した5冊の教科書のうち、Seni Budaya, 中学3年生用、2012年出版、Global社版では、ゼメスター1でアジアの音楽、ゼメスター2で西洋の音楽という構成をとり、後者でベートーヴェンやハイドンといった音楽史的事項に触れている。

## 引用・参考文献

- 生田久美子（1999）「『わざ』の伝承と文化—インドネシアの舞踊教育を手がかりに」『杉野女子大学・杉野女子大学短期大学部紀要』第36巻, pp. 151-156.
- 石井由理（2017）「音楽文化を通して見たナショナル・アイデンティティ—シンガポールの事例」『山口大学教育学部研究論叢』第66巻第3号, pp. 1-12.
- 大田美都・本多佐保美（2020）「アジア地域の音楽を教材とする中学校音楽科授業プランの提案—小泉文夫の

音楽教育論を土台とした授業実践開発」『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 18, pp. 84-93.

- 小田豊編（2003）『音楽のカリキュラムの改善に関する研究—諸外国の動向—』, 教科等の構成と開発に関する調査研究研究成果報告書(15), 国立教育政策研究所.
- 風間純子（2008）「インドネシアの音楽教育—タマンシスワ学校幼稚園における子どもの歌を中心に」, 中京女子大学子ども文化研究所『子ども文化学研究』第16号, pp. 1-22.
- 川口明子（2011）「スンダの伝統音楽と音楽教育—子どもの歌を中心に」『インドネシア・ニュースレター』No. 75, pp. 11-24.
- 木村佳代（2017）「バニュマスの竹のガムラン『チャルン』奏法とその特色」『伝統と創造：東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要』Vol. 6, pp. 15-28.
- 高萩保治（1995）『音楽教育の国際化—比較教育研究へのアプローチ』音楽之友社.
- 滝澤達子（1993）「アジア諸国の概況」, 宮野モモ子編『ソナーレ音楽科教育実践講座』（第15巻 音楽科教育の動向）, ニチブン.
- 田中義隆（2019）『こんなに違う！アジアの算数・数学教育—日本・ベトナム・インドネシア・ミャンマー・ネパールの教科書を比較する』明石書店.
- 中矢礼美（2006）「インドネシアにおけるコンピテンシーを基盤とするカリキュラムに関する研究」『中国四国教育学会 教育学研究ジャーナル』第3号, pp. 19-28.
- 日本学校音楽教育実践学会編（2012）『音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較—日本, カナダ, 韓国, アメリカ, ドイツ, イギリスをめぐって』音楽之友社.
- 樋口文子・木村佳代（2014）「インドネシア国立芸術大学スラカルタ校におけるガムラン研修（合奏授業および個人レッスン）同行報告」『伝統と創造：東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要』Vol. 4, pp. 1-14.
- 本多佐保美（2006）「音楽教科書にみる日本伝統音楽教材の取扱い」, 音楽教育史学会編『戦後音楽教育60年』, 開成出版, pp. 121-130.
- 本多佐保美（2017）「戦後中学校音楽科教科書における日本伝統音楽の取扱い—歴史的変遷および日韓比較の視点から」『千葉大学教育学部研究紀要』第66巻第1号, pp. 239-245.
- リザ アディンダ（2006）「マレーシアとインドネシアにおける音楽教育に関する研究—国家アイデンティティ形成の役割としての音楽教育の制度と実態の比較」『九州教育学会研究紀要』第34巻, pp. 43-50.
- Takizawa, T. ed. (1992) *Perspectives of Music Education in Japan and ASEAN Countries: Towards a New Scope of Music Education as Cultural Education*. Tokyo: Academia Music LTD.